

ポーランド名作映画祭

■主催/日本対外文化協会/実行委員会/ポーランド大使館
 ■後援/朝日新聞社
 ■提供/松竹・東映



心に残る感動を
今、おとどけします。

ニュープリント完全版

10月27日(土)→11月16日(金)
特別ロードショー!

伊勢丹斜め向 新宿東映会館2F
新宿映ホール (351) 3022

戦後ポーランド映画の原点

50年代後半から60年代初めにかけて、ポーランド映画はめざましく昂揚し、爆発し、その成果は世界中の人々を瞠目させた。世界各国の賞という賞を総ざらいにし、その衝撃は計り知れない影響を若者たちに残した。カメラ・アイは、現実を切り裂き、過去の戦火の傷痕と、現実の閉ざされた空気、そして未来の可能性を執拗に描ききり、いや応なくひとつの青春がそこにあった。ワイダが、カワレロヴィッチが、チプルスキーが、ポランスキーが“ポーランド派”と呼ばれ、それぞれ独特の映像芸術をフィルムに刻みつけた。戦後ポーランド映画の昂揚を語るには、まずポーランドという国の歴史的状況を語らねば理解できない。

1939年、首都ワルシャワを含むポーランドは、ナチス・ドイツ軍の侵入によって占領された。ヒトラーはポーランドに対していっさいの芸術活動を禁止し、ありとあらゆる自由が奪われ、ワルシャワの空気は占領下の重圧に閉ざされた。ワルシャワ・ゲットーにおけるユダヤ人蜂起、アウシュヴィッツその他無数の強制収容所の地獄、20万人の犠牲者をだしたワルシャワ蜂起……ポーランドでは軍人よりはるかに多くの“非戦闘員”＝一般市民がナチスの犠牲となった。602万8千人の死者のうち、“直接戦闘行動”で死んだのは、一割弱であり、あとの九割は強制収容所や牢獄などでの死だ。この数字が物語るのは、民族絶滅をはかるナチスの凄絶な皆殺し作戦と、民族の誇りを賭けて必死に抵抗した市民との壮烈な攻防である。

ポーランドの支配層は、ナチス侵略と同時にロンドンに亡命し、そこに政府を設置した。亡命政府の指導のもとで“国内軍”がレジスタンスをはじめ、共産党(1942年以降、労働者党と改称)を中心とする地下抵抗運動の

バルチザンも、ナチ占領軍への戦いをはじめた。ソヴェートに亡命した革命家たちは、1943年にポーランド第一軍を組織し、同年11月には、ソヴェート軍とともにモレンスク解放戦をはじめ、翌年7月にはついにポーランド国境を越えた。国内の反ナチ諸派はポーランド国民解放委員会を創設。人民民主主義をめざす新国家建設への一歩を記した。反ナチ陣営は、反ナチという点でのみ共通し、しかしその形態は各派とも利害により異なり、一種の競合状態となっていた。

旧地主勢力による、ロンドン亡命政府はあわてて“亡命軍”にワルシャワ蜂起の指令を下したが、ワルシャワの東を流れるヴィスワ河対岸まで来ていたソヴェート軍には何の連絡もなかった。1944年8月1日、ワルシャワ蜂起の悲劇はこうして始まった。映画「地下水道」は、ひたすらソヴェート軍の進軍を信じながら地下水道で全滅していった若者たちの悲劇を徹底的にリアルな描写で描き、賞賛を浴びた。蜂起は敗北した。ワルシャワが解放されたのは、翌1945年1月17日のことだった。旧体制復活を狙う亡命政府は、“国内軍”を利用して、反共・反ソのテロ活動をはじめ、ソヴェート軍将校や労働者党活動家たちを次々と襲撃した。「灰とダイヤモンド」の主人公・マチェックも、そうした悲劇のテロリストのひとりだ。ポーランド国民解放委員会は、1945年4月、臨時政府となり、ポーランド人民共和国が事実上誕生した。そして戦後のスターリニズムによる大国からの沈黙と圧迫の時代がやって来る。1953年、スターリンが死に、雪どけの季節となる。戦後10数年を経て、ようやく新しい世代の映画作家たちが、屈折した民族の悲劇を、大胆に、率直に、痛恨のうちに発言できる時代がやって来た。

10/27(土)

灰とダイヤモンド

監督/アンジェイ・ワイダ
主演/ズビグニエフ・チプルスキー
エヴァ・クジジエフスカ

11/2(金)

夜行列車

監督/イエジー・カワレロヴィッチ
主演/ルチーナ・ウインニッカ
レオン・ニエムチック
ズビグニエフ・チプルスキー

11/3(土)

地下水道

監督/アンジェイ・ワイダ
主演/タデウシュ・ヤンツァー
テレサ・イジエフスカ

11/9(金)

水の中のナイフ

監督/ロマン・ポランスキー
主演/レオン・ニエムチック
ヨランタ・ウメッカ
ジグムント・マラノウィッチ

11/10(土)

遠えらい雷

<カラー作品>
監督/イエジー・ホフマン
主演/ダニエル・オルブリフスキー
マウゴジャータ・ブラウネック

11/16(金)

灰とダイヤモンド

●監督/アンジェイ・ワイダ
●主演/ズビグニエフ・チプルスキー
エヴァ・クジエフスカ

第2次大戦直後、混乱のワルシャワを背景に、暗殺者として生き抜こうとし、はかなく散った一青年マチェックを通して、混迷の世相に、もろくも灰の如く崩れ去るものと、ダイヤモンドにも似た輝きを放って前進を続けるものとの相剋を描き、その中で苦悩する若い世代の純粋な魂の慄えを、鮮烈に浮き彫りにした傑作である。

1945年5月。ドイツ軍降伏のニュースが流れるワルシャワでは、新政府を樹立した共産党系と、ロンドンに亡命政府を置いた旧政府系の影の死闘が展開されていた。主人公マチェックは旧政府側のテロリストであり、新政府要人暗殺のために、ワルシャワに潜入していた。ホテルのメイドとの束の間の愛。解放を祝う花火を背景に、マチェックは衛兵に射たれ、ゴミ捨て場でみじめに死んでゆく……。

イエジー・アンジェイエフスキーの同名原作は、発表当時、ポーランド文学界に一大センセーションを巻き起した。『世代』（未公開）「地下水道」と並んで、この映画は、名匠アンジェイ・ワイダ監督が、ポーランドの戦後混乱期を描いた秀作3部作のひとつを成す。主人公マチェックには、ズビグニエフ・チプルスキー。“ポーランドのジェームズ・ディーン”と呼ばれた彼は、いまも語り草にされている黒眼鏡と共に、ひとつの時代の象徴として永遠に世界の人々の記憶に残るだろう。「夜行列車」「夜の終りに」「二十歳の恋・ポーランド篇」など、ワイダ監督とのコンビで次々と傑作を放った後、彼は1967年1月8日、走る汽車にとび乗りそこねて死んだ。その死は“ポーランド派”のひとつの時代の終りとさえ言われる。ヒロインのエヴァ・クジエフスカは象徴的な美しさを感じさせる個性的なマスクの持主で、この映画に出演当時は、芸術学院在学中の学生だった。撮影はイエジー・ウォイチーク。音楽をポーランド楽壇の重鎮フィリップ・ノワック指揮のウロツラウ放送五重奏団が担当している。

かけがえのない青春を祖国に捧げ、時代の流れから疎外された人々への深い共感と追悼が、ここにはある。恋人がマチェックに訊ねる。「どうして、いつも黒眼鏡をかけているの?」「祖国への報われぬ愛の記念さ」……。

1時間43分

夜行列車

●監督/イエジー・カワレロヴィッチ
●主演/ルチーナ・ウインニッカ/レオン・ニエムチック
ズビグニエフ・チプルスキー

スターリン死後、ポーランド映画機構の改革がはじまった。創作集団別のユニット制となり、一種の独立プロダクション・システムが“雪どけ”とともに、設置された。1955年にスタートしたユニットは、六つ。その中でも“ポーランド派”のもっとも大きく強い拠点となったのが、イエジー・カワレロヴィッチ監督ひきいる〈カードル〉である。アンジェイ・ワイダもまた〈カードル〉のメンバーだった。「夜行列車」は、「影」戦争の真の終り」「尼僧ヨアンナ」などで、日本でも知名度の高い巨匠カワレロヴィッチの最高傑作である。

ワルシャワからバルチック海沿岸の町に向かう“夜行列車”を舞台に、列車に乗りあわせた人々の人生模様をサスペンス豊かに描きつつ、戦後ポーランドの不条理な心理の動きと倦怠が克明に描かれ、ベニス国際映画祭では、その優れたドラマ・テクニクに対し、ジョルジュ・メリエス賞が授けられた。

ストーリーは、列車の進行とともに、恋人と別れるために旅する傷心の女を中心に、逃走中の殺人犯など、さまざまな人物がからむ物語が進んでゆく。断片的なエピソードのつながりの中から、登場人物ひとりひとりの孤独な内面がモザイク模様のように浮き彫りにされ、ゆううつなスクリーンが、やるせないムードを盛りあげた。社会主義国の現状が、必ずしも明るいものでないことを初めて大胆に描き、公開当時大きな反響をまきおこした。

主演女優のルチーナ・ウインニッカは、「尼僧ヨアンナ」でわが国に紹介され、その演技力は世界各国から注目を浴びた。彼女はワルシャワ大学を卒業後、1953年ポーランド国立演劇学校を出て、カワレロヴィッチの作品『フリジャの星の下』（未公開）に出演して認められ「戦争の真の終り」で主演女優に抜擢され、つづいてこの「夜行列車」に主演、ポーランド映画の魅力を世界中に知らしめた。私生活ではカワレロヴィッチ夫人でもある。またスタシェック役として「灰とダイヤモンド」のズビグニエフ・チプルスキーが出演しているのも話題のひとつである。

1時間40分

地下水道

●監督/アンジェイ・ワイダ
●主演/タデウシュ・ヤンツァ
テレサ・イジェフスカ

アンジェイ・ワイダ「地下水道」で、世界に新しい存在を知らしめた。これは思想状況下で生まれた。そのために戦後の世代にも強烈な共感を

第二次大戦末期、ソとみたワルシャワのロンドンにある亡命政府に武装蜂起したが、ドイツ軍によって壊滅的このとき、ナチスにより生まれ、悪臭と泥土迷い、あるいは地上に無念にも全滅していったドキュメンタリー全篇、長い移動カメラを除いては、全て地下這いまわる描写で終始岸にはソヴェト軍が政治的な意図によって起。それによって20万ワルシャワ市民。1944一ランド国民の心に深その痛恨の思いを画面度カンヌ映画祭の審査

ワイダ監督はダイナミクする青春像を画面に「灰とダイヤモンド」のみならず、世界の映立った。脚本は、クエスタヴィンスキー。ス1944年当時、アルミア軍の一員として、下験している。撮影は、トナ」（未公開）「二篇」などでコンビを組マン。音楽をヤン・ク・イジェフスカ、タデテレサ・ベレゾフスカ

道

監督は、この「地下水道」ポーランド映画の存在、スターリン批判後の新しい映画の叫びであり、曲折を経た日本の若いもって迎えられる。ヴェト軍の進軍近しジスタニスたちは、ロの指令のもと、いっせ空しても、ナチス・ドな打撃を与えられた。って地下の下水道に追のなか、あるいは道に出たところを捕われてた若者たちの悲劇を冷・タッチで描いてゆく。の使用で、始めと終りの下水道のドブの中をする。ウィスワ河の対岸にはソヴェト軍が操られたワルシャワ蜂人もの犠牲者を出した年、奇怪な状況は、痛い傷痕を残した。——で容赦なく描き、59年貝特別賞を受賞した。ミックな造形力で、苦定着させ、この作品ととで、ポーランド映画画界で第一線の位置にルジー・スタファン・タヴィンスキー自身も、クラヨワ（国民義勇水道のなかの行進を経同じワイダ監督の『二十歳の恋・ポーランドむ、イエジー・リップレンツが担当。テレサウシュ・ヤンツァー、などが出演している。

1時間36分

水の中のナイフ

●監督/ロマン・ポランスキー
●主演/レオン・ニエムチック/ヨランタ・ウメッカ
ジグムント・マラノウィッチ

強烈な戦争体験から直接的にメッセージを投げかけたワイダ、カワレロヴィッチ、ムンクらの世代のあとに、もう一回り若い戦後派が登場した。ロマン・ポランスキーである。のちに「袋小路」「マクベス」「チャイナタウン」など故国ポーランドを離れて、数々の秀作を放った、これは彼の長篇処女作である。

登場人物は3人——壮年期の知識階級に属する中年男と、その美しい妻がヨット遊びに出かける。そして途中で1人の正体不明の若者をひろう。この3人のヨットの上でのほぼ2日間の生活。ことごとに対立する中年男と若者。それに対して微妙に反応する女心が鮮やかに描きだされる。1961年に製作発表されるや、この映画はポーランドのみならずヨーロッパ全土で話題を呼び、各種の賞を独占した。

映画の展開には、何の難解なひねりも意味ありげな仰々しさもなく、淡々とした単純な描写がつづく。3人の男女。走るヨット。沼沢地帯の空と水。雲や風や雨の無言の存在感。それが事件らしい事件もなく、心理的なサスペンスだけで終始する人間たちのドラマを形成し、戦後ポーランドの置かれている暗い状況と、その中で動めく、これからのポーランドの姿を鋭く提示している。

監督ポランスキーは、パリ生まれのユダヤ系ポーランド人。少年時代にレジスタンス運動やワルシャワ蜂起を体験。息苦しい衝撃の大きさゆえか、面と向って社会の断面を描くことはないが、彼の形作るドラマ状況は常に社会主義国の影の部分をつらとひきずっている。

脚本には、のちに『バリエラ』（未公開）「早春」など映画作家として華々しい活躍をはじめた、イエジー・スゴリモフスキーが参加している。明暗を巧みにとらえた美しい撮影は「地下水道」のイエジー・リップマン。音楽を「ローズマリーの赤ちゃん」のクリストファー・コメダが担当。出演者は、中年の夫に「夜行列車」のレオン・ニエムチック、若妻に、ヨランタ・ウメッカ、青年に、ジグムント・マラノウィッチが扮して好演している。

1時間34分

遠雷

（カラー作品）

●監督/イエジー・ホフマン
●主演/ダニエル・オルブリフスキー
マウゴジャータ・ブラウネック

ヘンリク・シェンキエヴィッチの原作（『大洪水』）は、同じシェンキエヴィッチ原作による『夜明け』、エリザ・オルシコワ原作『メイル・エゾフオヴィッチ』などとともに、ポーランドの代表的古典劇であり、民族の独立への願望、ロマンティックな精神と激しいエネルギーがあふれるものである。ノーベル賞受賞作家であるシェンキエヴィッチのその原作を基に、17世紀ポーランド貴族の歡樂、酒宴、決闘、恋、などが華やかに色鮮やかに描かれる。その背景にスウェーデンの侵略、ポーランドの反撃がダイナミックに展開する。スウェーデンが進攻を開始し、困難に際して貴族たちは醜態ぶりを見せた。そのポーランドの苦難の時代を「大洪水」と呼ぶ。映画は当時の風俗を衣裳から軍事的な細部にわたって、徹底的に忠実に再現している。ポーランド映画界、最高にして最大のスケール。広大な平野でラストを締めくくる凄絶な会戦。ポーランドの古城と、その据野を使用して行なわれたすさまじい白兵戦。その雄大さは映像独自のひろがりを見せ、筆舌につくしがたいほどの感銘を我々に与える。カメラの前であたかも本物の戦闘が行なわれているかのような衝撃のシーンの数々。いや、これは本物以上の戦闘だ!! 無敵のポーランド騎兵等1万人を超えるエキストラが動員され、特別な訓練をへて、この映画に参加した。衣裳は、ポーランド、スウェーデン、ドイツ、タタールと、1万着を超える豪華なもの。又、武器や宝石等当時の本物が多数使用されている。

監督は、記録映画から劇映画へと、その才気あふれる演出が評判を呼ぶ、イエジー・ホフマン。日本公開作は、これが初めてであるが、『ミハエル公』（未公開）や、この「遠雷」を含めて、大歴史スベクタクル映画に独特の才腕を示している。出演は主人公である騎士クミチクに、ダニエル・オルブリフスキー、ヒロイン、オレニカに、マウゴジャータ・ブラウネックが、重厚に華麗に役柄を演じている。監督のホフマンは語る——「『遠雷』は、シェンキエヴィッチの作品を手がけて10年になる私の仕事の集大成となるものだ。この作品は私にとって、最大の規模のものであるばかりでなく、最良のものと考えている」

3時間3分